

# 第三百十七回 青葉会

平成二十四年八月二十三日(木) 午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 石川清 今井紀久男 大林猛 小川恭延 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯  
福島正明 山崎亜也 山内天牛  
伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 橋口隆 古田昇 宮内規雄  
渡邊盛雄

〈紙上選句〉

川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 星田啓子 村田くに子 山崎青史 山本三恵

《選者吟》

ロツクからサンバへ五輪をつなぐ秋

秋日落ち誰か押すかな降車ベル

眼鏡失せ浮雲多き処暑の空

八月や今も共寝の防空頭巾

秋蟬の独唱斉唱大合唱

万里子 (猛・弘)

全 (清)

全 (弘)

全 (紀)

全

ゴシツクは撰者の天

《互選句》

九点 ☆ 鉛筆を削る匂ひや今朝の秋

弘子 (万・猛・五・ゆ・一・允・正・啓・く)

七点 ☆ 飯盒の凹みし蓋や敗戦忌

一灯 (万・弘・ゆ・正・啓・青・天)

六点 (類句あり。なるべく避けた方がいいのでは?)

秋暑し朽ちゆくままの忠魂碑

紀久男 (ゆ・敏・一・正・亜)

峰雲やレタス畑の開拓碑

一灯 (紀・恭・敏・ゆ・允・亜)

五点 かき氷崩し終わりに一呼吸

そらお (清・五・ゆ・亜・天)

☆ 八月や母の遺せし被爆の記

ゆたか (万・紀・弘・允・く)

四点 生かされる木 僅咲く日の救急車

忠彦 (清・紀・啓・三)

(あの日から一年)

☆ 立ち代り朝顔問答路地仲間

堂哉 (万・龍・一・啓)

初月夜切絵の如き剣岳

一灯 (清・恭・敏・啓)

☆ 岩ひばり高鳴く尾根の遭難碑

全 (万・清・紀・孤)

寅さんとイエスの話灯火親し

正明 (孤・敏・天・三)

☆ ケーブルカー切符を持たぬ秋あかね

全 (万・猛・一・青)

(青：同行の幼児が「トンポチャン、切符持ッテナイ！」と叫んだのでしょうか)

昇 (紀・孤・五・青)

(青：何万本ものヒマワリ。広大な景がいい)

人間国宝一龍斎貞水を聞く

猛 (孤・敏・正)

三点 納涼や寄席でお岩の誕生話(わ)

健介 (紀・孤・龍)

国境の離島も同じ鯛雲

昇 (孤・く・青)

海霧(じ) 抜けて漂流船の現はるる

規雄 (猛・龍・青)

(青：夏だから幽霊船の方が良かったのでは?)

美人らしき白き日傘の遠く行く

規雄 (猛・龍・青)

(龍：「らしき」の「き」は不要では?)

(青：「らしき」は「ならん」の方がいい。速足で追いかけて確かめては如何?)

秋なすび間口二間の八百屋かな

天牛 (ゆ・允・三)

落蟬の眼(まなこ) 宇宙を見つめるや

そらお (啓・天)

二点

☆盆明くる灯りともして客を待つ

(☆動詞三つあり。一つにすること)

白球を追ひし球児の夏終る

全 (允・く)

「桜姫東文章」の釣鐘権助

夏芝居海老蔵濡れ場の生生(なまなき)し

紀久男 (敏・く)

手術する友へ訥訥(とつとつ) 残暑見舞

弘子 (紀・恭)

投擲の雄叫び残し夏了る

ゆたか (猛・亜)

(五輪のハンマー投)

無花果(いちじく)をもぎて零るる白き乳

亜也 (弘・二)

☆鰻の日床屋はもつぱらその話

天牛 (万・弘)

敗戦忌闇にさまよふ無縁仏

盛雄 (紀・恭)

五輪終へ五感も静か今朝の秋

全 (猛・三)

飯館村々長

一点

村長の祈り切なる原爆忌

清 (紀)

☆一週間孫と合宿泳ぎ抜く

紀久男 (万)

炎昼やまたも癌死に喪服着る

全 (恭)

脳天をとかしつくすか炎天下

猛 (天)

底なしの空の青さや秋気満つ

恭延 (允)

マスールに会釈返せし夏の朝

五郎太 (三)

☆ジヨギングをすいと追い抜くペア・レガッタ

全 (万)

(☆レガッタは春の季語)

五才児の急峻登頂や涼新た

健介 (一)

(一:「や」と「た」は不要)

天井の煤けも眺めビヤホール

弘子 (正)

(正:眺め↓床し)

庭園のさざめき浚ふ萩の風

全 (龍)

名を知らぬ橋を越へ来て秋の海

全 (五)

八月は鎮魂の月堪へる月

惠洲 (紀)

滝までを一朵(いちご)の雲を道連れに

堂哉 (龍)

青空見また青空見終戦日

ゆたか (亜)

夏の夜の涙に光る銅メダル

全 (清)

(金や銀よりドラマチック)

音たててコルク栓飛ぶ夜半の秋

一灯 (龍)

クーラーの部屋より出でてへの字かな

隆 (紀)

点描派の絵のやうに鳴く蝸

正明 (青)

(青:実にうまい比喻です。驚きました)

民を撃つ銃口の闇流れ星

全 (恭)

日野草眺めて今日も暮らしけり

規雄 (五)

☆いな群れて隅田の川面早や黄昏

亜也 (万)

延竿で鯊釣る佃オンドマリ

全 (天)

落鰻四十川とマリアナと

全 (正)

社長の娘(三)夏の甲子園喇叭ふく

天牛 (亜)

●次回青葉会

九月二十七日(木) 午後六時〜九時

(丸紅 談話室)

▲当季雑詠各自五句。投句は二句

十月二十五日(木)

十一月二十二日(木)

平成二十四年八月旬会報

一 今回は先生以下12名出席。投句9名。「俳壇」九月号にデビューした弘子さんの句を回覧し乍ら久しぶりの五郎太さんの進行役で御覧のように弘子さん一灯さんが高得点でした。先生お手製の鮓、アボガドの煎餅、くるみ黒糖、弘子さんのどら焼（鶴屋吉信）、正明さんの「薩摩古秘」（雲海酒造）、五郎太さんのハーヴァード土産のチョコココOPと寄贈品やビール等どんどん飲食し乍ら盛会となりました。

当日の話題（一）ハーヴァード留学生に目立つ中国人と霞んでいる日本人（二）社友会のHPに続々お仲間が寄稿：代表幹事を退任された恵洲さんが編集担当されておられる為会員各位が協力（三）二年前亡くなられた村岡さんの奥様の急逝等々。「彼の人が面影に立つ大文字」 盛雄

二 関係者近詠

万里子

病床の妻美しや夕焼空

規雄

青嶺から旅窓に迫る送電線

全

―「NHK俳句」9月号 大石悦子選

白く佇つ観音の背の青嵐

全

あの頃は山も畑も箒（はき）草

全

老若の僧の緑衣や走り梅雨

全

―「NHK俳句」9月号 岩岡中正選

校門にも六文銭紋桜の実

全

白魚のひかりもろとも掬はるる

孤舟

藩校に象山の遺志新樹光

全

若鮎に未知の渚あり流れあり

全

どくだみの一本も無き戸隠山

全

虹立ちていよよ帰心の膨めり

全

額の花雨に始める針仕事

眞希子

甚平の胡座の中の甘えつ子

全

トマトに刃嫌ひて一人遅昼餉

全

ハンモック風の機嫌を聞いてをり

全

短夜にかち合ふ厠姑と嫁

全

―「爽樹」九月号

名園に清く貧しく姫女苑

弘子

石臼の金魚に丸き時間あり

弘子

草陰に水音尖る桜桃忌

全

誰とでもすぐに笑へる夏帽子

全

六月やわつわつと開く鯉の口

全

まとめ髪振りほどくごと赤カンナ

全

春昼この金環触見しラツキーボーイ

和夫

一匹の蚊と鏡中に試着室

全

祇園会の京友禅を競ひ合ひ

全

白玉へちよんと笑窪を葉指

全

鳴く河鹿びたりと止みて沢の音

忠彦

―「俳壇」九月号 『百花競詠女性俳人54人』

水泳部OB会

冷酒鯨飲椅子から落ちる元河童

紀久男

爽やかに熱き五輪の終りけり

允章

―「萬緑」九月号

冷酒鯨飲椅子から落ちる元河童

全

蛸のこゑの沁み入る外湯かな

全

爽籟や林の中の美術館

全

何重唱終りはびたり蟬時雨

堂哉

緑樹中目立つ赤茶の津波跡

全

河原四郎

三 句会開催日重なって投句専門の古田昇さんが所属結社「海」（高橋悦男・元早大名誉教授が主宰）

の同人に推挙された由。「未だ入会3年目で荒削りですが、個性的な若々しい俳句を心掛けたいと思います」とのことです。御精進ぶりが窺えます。准会員の渡辺三太さんも所属する地元俳誌の同人になられた模様です。

以上

九月九日

紀久男記